令和8年度第2回大阪府スポーツ推進計画部会における意見整理表

資料1

	委員からのご意見	答申案たたき台への反映
第1章	指標に対する目標値として実施率100%と70%と定めているが、これは国に準じて、国と歩調合わせていこうという決定である。そのため、計画策定の視点において「ともに目標値達成には至らなかった」と記載があるが、「全国平均と比較するとわずかに下回る結果だった」のように、国と歩調を合わせていることが示される記載を検討して欲しい。	2 計画策定の視点 （1）第3次大阪府スポーツ推進計画の進捗状況
第2章	めざすべきスポーツ都市像である「スポーツで実現する持続可能な都市・OSAKA」は、スポーツが様々なものを一から創り上げることで実現するという捉え方もできるが、現実的には、大阪にある食や自然などの今ある資源と、ワールドマスターズゲームズ2027関西の開催や大阪・関西万博レガシー等をつなぎながら、新たなスポーツの価値を創造し、持続可能都市を創っていくことだろう。	1 めざすべきスポーツ都市像
	ライフステージに応じたスポーツ機会の創出により、一人ひとりがウェルビーイングを感じることができる持続可能性も理念としてあるだろう。加えて大規模スポーツイベントなどによる国内外からの誘客により府民が負担を感じることなく、一体となり機運を高めていけるよう共創していくという持続可能性とともに、日常にスポーツが根ざし、生涯スポーツへつなげていけるような持続可能性も理念としてあることについて、十分共有されるような伝え方をして欲しい。	
	第4次大阪府スポーツ推進計画では「スポーツで実現する持続可能な都市・OSAKA」をめざすべきスポーツ都市像として掲げているが、持続可能性はとても大きな概念で、スポーツのみで完結できるものではないため、スポーツと持続可能性がどのようにつながるのかを第1章あるいは第2章で記載することが必要。	
	持続可能性、社会課題の解決から大阪のスポーツ実施率につながっているが、そこをつなぐ概念を冒頭で示すことで、スポーツの価値や中身がより生きてくる。そういう意味では、健康や人とのつながり、地域ネットワーク、共生社会が持続可能性を生み出すキーワードとしてあるので、そこをつなげてウェルビーイングに落とし込む流れがあると良い。	
	誰もがウェルビーイングを感じ、生涯に渡りスポーツに親しむことができ、世界中の人が集まると持続可能な都市になるとの設えであると思うので、そのストーリーをしっかり示した方が良い。	
	8ページのスポーツ観戦の多様な価値について、言葉を含めてとても良いなと感じたのだが、現状は第2章の基本的な考え方に一言記載されている程度であり、それほど全体を通して触れられてない印象。例えば、スポーツ庁では2024年度に「スポーツの持つ5つの価値」として健康、ローカルブランド、環境、社会、経済を強調しており、この点を第2章に記載することで第3章につながるとの印象を受けた。	
	全体的な設えに関わる委員の意見について、持続可能の概念が本計画のどこにつながっていくかを明記するなど、反映して欲しい。	
	健康とスポーツに関しては、国におけるスポーツの概念、範疇が広がっており、階段の上り下りやバス停間の一駅を歩くこともスポーツと言われている。運動・スポーツを実施した理由が「健康のため」が最も多いことからも、歩くのは健康のために歩くのであって、仲間との交流のためではないので、「つながり」「楽しさ」の部分は下がってしまうのではないかとの懸念もあるため、計画では、スポーツで人とつながること、スポーツの楽しさを実感できることについては、丁寧に書き込むことが必要。	
	スポーツの定義であれば、会場に行ってボッチャをしなければならないが、今後の幅広い定義で考えると、人とつながる、毎日できる、同じぐらいの活動量があるという意味で、何が違ってくるのか、個人的にも疑問に思っている。	
	身体活動を伴うようなeスポーツ、いわゆるバーチャルスポーツもあるが、バーチャルスポーツ単体で使うのは難しいとイベントを主催していた身として感じている。バーチャルスポーツはデジタル空間を使い身体活動を行うものであり、こういった部分を生涯スポーツと競技スポーツの掛け橋となるようなところで施策へ盛り込むのか、あるいは第2章の基本的な考え方に入れるのか、また、議論できたら良いが、国の計画の方向性で言うと、共生社会、生涯スポーツ、都市魅力、スポーツツーリズムといった観点からは非常に大事と思うので、今後の検討にしても良いのではないか。	
	駅まで歩いたり、街中スポーツのような公共空間を使うアーバンスポーツなどの「スポーツ／身体活動」を中心に、複合領域として「観光」「交通／モビリティ」「都市計画」「環境」「健康／福祉」が線でつながることを示すことで議論の幅は広がるのではないか。図示できれば大阪都市魅力創造戦略2030や第4次大阪府スポーツ推進計画、国の方針などの領域横断の意味でも良いと感じた。	
	めざすべきスポーツ都市像について、既存資源をつないで新たな価値を生み出していくという理念もあるだろう。	
	今後、対象はどんどん若くなっていくと思うが、学生の質で言えば非常に変わってきている。今、スポーツで「つながる」感覚はほとんどなく、つながりたいと思っていないのではと感じる。そのため、人気の運動はウォーキングやヨガのような1人でできるスポーツであり、人とのつながりはSNSを利用している。学生に施設開放すると、チームスポーツであるバスケットボールやバレーボールには人が集まらず、卓球、バドミントン、ウォーキングルーム、有酸素マシンなどが人気。スポーツでつながる感覚がないため、共創の定義を入れてスポーツとするのであれば、スポーツ実施は徐々に減少すると感じている。人と競いたくないのが前提にあり、私が通うスポーツクラブでも競わせないことが大前提にある。個々で体を動かすことを楽しむ人に「スポーツで人とつながることは楽しいこと」と言っても必要としない人たちのスポーツ実施率は上がらない。そう考えると、戦略も変えていかざるを得ないと感じている。	1 めざすべきスポーツ都市像 めざすべきスポーツ都市の実現に向けて 「スポーツを通じて誰もがウェルビーイングを感じられる大阪をめざす」
	「持続可能な都市」と個別施策について、計画全体では「スポーツで実現する持続可能都市・OSAKA」をめざすと掲げ、それを体現するところとしてサブタイトルがあることの説明があった。2の柱にはSDGsのマークがあり、1の柱にはマークが入っていない。1の柱の中には参加、健康、共生社会、地域の居場所や生きがい、人材育成、さらに持続可能なスポーツの提供、都市など社会的な持続可能性のつながり要素などが含まれていることから、持続可能性を1の柱にもうまく入れるよう言葉の工夫をしても良いのではと感じた。	1 めざすべきスポーツ都市像 めざすべきスポーツ都市の実現に向けて 「1の柱 誰もが生涯にわたりスポーツに親しめる大阪をめざす」
	「する」「みる」「ささえる」の割合が全国、大阪府ともに年々減っているのにもかかわらず、令和13年度に100%をめざすのは難しい。アンケートの工夫により、「する」「みる」「ささえる」の割合が100パーセントに向かっていくのではないかと思う。	－
	参画率100%はめざして欲しいが、参画率が年々減っている状況で本当に達成できるのか。コロナ明けから減っているのは深刻であり、減っている理由としては、物価上昇など、色々と考えるところである。ぜひとも参画率があがって欲しい。	
第3章	eスポーツがスポーツか身体活動かは別としても、ゲームのコントローラーを動かすこととボッチャが同程度の活動量となる方もいるため、コントローラーを使えばスポーツにならないと考えるのは違うのではないかとの議論もある。	1の柱 3「スポーツ環境づくりによる共生社会の実現」 （ア）パラスポーツの推進
	第3章1の柱「3 スポーツ環境づくりによる共生社会の実現」について、目標では「障がいの有無、年齢、言葉、文化の違いを超えたスポーツの持つ多様な「楽しさ」をいかした交流の場づくり」とあり、これが実現することによってスポーツを通じたつながり、充実感、幸福感につながっていくため、とても重要であると感じるところ。この施策の方向性について、障がいのある方に対する取組やパラスポーツの推進が記載されており、その他の様々な属性の方に対するスポーツの価値の享受を進めていく点が見えづらいので、「・障がい者がスポーツの魅力を体験できる機会の充実」に加えて「・障がいやジェンダー、年代国籍に関わらず、誰もがスポーツの魅力を体験できる機会の充実」を追加して欲しい。	
	「（ア）パラスポーツの推進」と「（イ）地域でスポーツを楽しむ環境づくり」があり、多様な属性の方が一緒にスポーツをすることで共生社会の実現をめざすには、パラスポーツ以外が薄い。例えば、日本だけではなく外国籍の方も申し込みや参加ができる工夫、女性のスポーツへの参加が少ないことに対しては女性コーチや指導者、運営側にもっと女性が入ると、よりスポーツへの参加が増えると考えられることから、そのような人材育成も含めたことを（イ）に記載するとよい。	
	eスポーツには様々なタイプがあり、例えば、シューティングからサッカーのようなもの、実際に体を動かすものなどもあるが、それをスポーツと捉えて、計画において普及するしないを議論する必要はないと感じるが、高齢者の認知症予防でeスポーツが活用されたり、あるいは障がいの有無にかかわらず同じルールで取り組めるなどのメリットを活かした様々な事業が行われていることは認識しており、それはぜひ活用していくべきかなと、そんなスタンスかと思う。	1の柱 3「スポーツ環境づくりによる共生社会の実現」 （イ）地域でスポーツを楽しむ環境づくり
	多世代交流という意味では、介護予防施策として太鼓の達人のように体を動かすものを子どもが高齢者に教える施策を行う自治体もいくつか聞いている。我々の大学のフィットネスルームにエアロバイクがあり、そこに対戦できるような画面をつけるような話もあり、既存のスポーツ、身体活動をより拡張させていくような手段にもなりえると思う。	
	eスポーツの国際大会に参加される方をアスリートと呼ぶのは違和感があるが、今後スポーツとして位置づけられるものも出てくると思うので、計画の中では特別に出すのではなく、様々な施策を進めていく中で活用が十分可能なものかなと思う。持続可能性、ウェルビーイングにも十分役立てられると感じている。	
	今回の計画では「3 スポーツ環境作りによる共生社会の実現」に関してeスポーツとの親和性が高いと感じる。具体的には、健常者、障がい者、外国人が比較的ボーダーレスに参加できるところが大きく、身体的条件に関わらず参入障壁を下げる効果もある。	
	身体活動を伴うようなeスポーツ、いわゆるバーチャルスポーツもあるが、バーチャルスポーツ単体で使うのは難しいとイベントを主催していた身として感じている。バーチャルスポーツはデジタル空間を使い身体活動を行うものであり、こういった部分を生涯スポーツと競技スポーツの掛け橋となるようなところで施策へ盛り込むのか、あるいは第2章の基本的な考え方に入れるのか、また、議論できたら良いが、国の計画の方向性で言うと、共生社会、生涯スポーツ、都市魅力、スポーツツーリズムといった観点からは非常に大事と思うので、今後の検討にしても良いのではないか。	

	委員からのご意見	答申案たたき台への反映
第4章	第4章2の柱の重点項目の順番について、「4 大規模スポーツイベント等の開催による賑わい創出」を1番上に持ってくることで、2の柱の世界中の人が集まる大阪の実現をより明確に示すことができると感じる。	2の柱 重点項目順番変更 「集客」→「周遊」→「まちづくり」→「経済活性化」の流れ
	2の柱は「スポーツにより世界中の人が集まる大阪の実現」であり、施策の方向性の最初の文章は、国際大会をはじめとする大規模スポーツイベントや大阪マラソン、そして、誰もが気軽に参加できるアウトドアスポーツイベント、これを見ると、世界中の人が集まることが見えづらいかなと感じる。大阪ならではの世界中の人が集まる規模感で計画を立てる必要である一方で、具体的にどのように世界中の人を集めるかをしっかりと記載すべきと感じる。2の柱「4 大規模スポーツイベント等の開催による賑わい創出」でワールドマスターズゲームズ2027関西の開催を契機とする内容が記載されているので、ここを起点として世界中の人が集まり、世界中から集まった人から府民が刺激を受けて、スポーツに関心をもつような契機にしていくストーリーの説得力が増すと思う。	2の柱 1「大規模スポーツイベント等の開催による賑わい創出」
	大阪・関西万博で培われた共創理念について、「大阪・関西万博で培われた共創の理念を継承し、地域や企業、スポーツ関係団体、住民等の多様な主体が連携し、地域の魅力を創出し、それらを発信する取組を推進し、交流人口の拡大を図る」ということで、様々な言葉や概念、階層、そして因果関係が入っている。例えば「大阪・関西万博で培われた共創の理念のもと、多様な主体との連携によりスポーツを生かした地域の魅力を創出・発信し、交流人口の拡大を図る」という形で整理すると良いのではないか。	
	子どもたちがなんらかの形でワールドマスターズゲームズ2027関西に関わる機会を創ることも前回までの部会意見としてあったが、2の柱の各重点項目に共創を散りばめられており、大きなイベントの際には府民が共創しなければ持続可能性につながらないため、大阪・関西万博レガシーとして府民であることに誇りを持ち、地域に愛着を持つことをワールドマスターズゲームズに絡めて強調して記載いただくと良い。	
	「1 様々な形のスポーツツーリズムの推進」という表現について、一般的にスポーツツーリズムは「参加型イベント」「観戦型イベント」「アクティブスポーツ」「ヘリテージスポーツ（歴史・文化価値のあるスポーツや運動文化のこと）」という形で活動特性によって類型化される。施策を見ると、大規模スポーツ大会や大阪マラソン、アウトドアスポーツといった形でヘリテージスポーツを除けば主要な連携はカバーできている。そう考えたとき、第4章1「様々な形のスポーツツーリズムの推進」よりは資源、例えば観光、食、健康等の融合や大阪が有するスポーツ資源の活用も示されているので、「多様な地域資源を生かしたスポーツツーリズム」または「多様な資源を生かしたスポーツツーリズムの推進」、さらに包括的に示すのであれば「多様なスポーツツーリズムの推進」などが考えられる。	2の柱 2「様々な形のスポーツツーリズムの推進」
	府が有する観光、食、健康などの資源とあるが、エンターテインメントが大阪のキーワードであり、「みる」スポーツにつながる重要な視点であるため、エンターテインメント性あるいは何かに基づくエンターテインメント都市などのキーワードも入れると良い。	
	都市と自然の両方があるという記載もあるが、大阪市内には都市機能が集積し、その周辺では自然環境がある。大阪の計画なので、府全体で実現できることが示されることも必要であり、市内の都市機能と自然施設など、全体を見た書きぶりになると府の計画らしくなっていくと感じた。	
	スポーツコミッションについて、1の柱「4 スポーツコミッションによる生涯スポーツの推進」があり、2の柱では“スポーツコミッション”という単語は重点項目の中にはなく、本文中のエッセンスとするとの説明であったが、スポーツコミッションの役割が、イベント等により域外から人を誘致することであるならば、むしろ2の柱でスポーツコミッションが活躍するところがある。スポーツコミッションもインナー・アウターの両方でやっていこうとのことなので、2の柱でスポーツコミッションの言葉を出して明確にすべきと思った。	2の柱 3「スポーツによる活力あるまちづくり」
	御堂筋の歩道化、フルモール化という方向性や都市公園にカフェの増加、さらに“てんしば”もきれいになったがのように公園が整備された事例もあるが、そうすることで運動につながっていく。そういったアクティブシティをどのように盛り込むかも、「環境を生かして・・・」と記載できるのではないか。	
	「スポーツ市場拡大」と「スポーツ産業振興」という言葉の使い分けについて、目標では「産業連携を図ることでスポーツ市場拡大をめざす」とする一方で、施策では「スポーツ産業振興の取り組みを推進する」と記載されている。両者は密接には関連するものの、同じ概念ではないため、例えば「スポーツ産業の振興とスポーツ市場の拡大をめざす」や「スポーツを核とした新たな産業ビジネスの創出を通じて市場拡大をめざす」などの整理が考えられる。	2の柱 4「産業連携等によるスポーツを通じた地域の活性化」
第5章	第5章の連携体制の強化について、大阪マラソンなどの大規模スポーツイベントの安全面での活動や救護では大阪府医師会と連携しているが、そういったスポーツイベントだけでなく、高齢者で膝が痛いなどにより、スポーツ参加に躊躇するような層がどうすれば安全にスポーツができるか、健康づくりのためのスポーツとしてさらに連携して取り組めることがあると感じているので、外部との連携強化をぜひ進めて欲しい。	2 連携体制の強化
その他	文章のバリエーションを増やしてはどうか。「必要である」「求められる」が多く使われているが、例えば「不可欠」「欠かせない」「期待される」「有用である」など、1つのパラグラフの中で色々な言葉を使って言い換える方が良いのではと感じた。	第1章～第5章
	本計画がどれだけ実効性のあるものになるかを考えながら意見を聞いていた。例えば、子どもの頃から運動することに楽しさを感じるということであれば、学校教育、学校における体育の授業は大きなウェイトを占めるが、実効性のあるものにしていくためには、小学校の先生方に楽しい授業をしていただけるよう、初任者研修や中学校の10年目研修など、先生方にアプローチしていくと良い。	－
	大阪府の教育進行基本計画には、体力の向上や環境の充実は記載されているが、楽しさという点はあまり入ってない気がしている。子どもたちが楽しさを感じ、授業に向き合っていく、実際自分でやっていくようなことも、計画への記載は不要だが、考えることで学校現場に広がっていく。	－
	大阪都市魅力戦略創造戦略2030においてもeスポーツをはじめとする新しいエンターテインメントコンテンツの普及促進が施策として明記されている。eスポーツは観光との親和性も高く、最近ではeスポーツワールドカップ（Esports World Cup 2026）がパリで開催され、主催するEsports Foundationが大会開催に約2.5億ユーロ（約460億円）を投資することが発表されている。加えて、配信視聴者数は約8.5億人に達し、約1,100億円の経済波及効果が見込まれている。こうした市場規模や集客力を踏まえると、大阪府市においてもMICEの観点からeスポーツイベントの誘致も検討する余地があるのではないかと考える。	－
	計画に盛り込むか否かについては、まだ、議論が煮詰まっていないが、現状、重度の身体障がいのある人は、ボッチャをするにもその場所に行かなければならず、また、ボッチャをする際、指先1本でプレーすることもある。	1の柱 3「スポーツ環境づくりによる共生社会の実現共生社会の実現」
	スポーツと言っていいかわからないが、バーチャル上で全世界の人とインターネットを通じながらやっている事実があるので、今後も議論が必要になってくるだろうと想像している。	－
	「大阪ならでは」といった記載があるが、漠然としてしまうため具体的な記載が良い。	2の柱 2「多様な地域資源を生かしたスポーツツーリズムの推進」 3「スポーツによる活力あるまちづくり」
	「誰が」の記載があってもよい。国では「国が」「自治体が」と記載しており、やはり府が取り組むことと同時に、大学も様々なことをしているので、「大学で〇〇に取り組んでいる」「基礎自治体は〇〇に取り組んでいる」のように記載することで具体性が生まれるのではないかと感じた。	－